

## 「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

### 第 107 回

『タイムリーな言葉 ～ 心に響く ～ 』

2022年4月29日（休日：昭和の日）に、筆者は、千葉県の成田市での講演会に赴いた。『「人間は、ロビンソン・クルーソーの様に孤島にひとり住んでいたのでは、良い人か悪い人かは判らない、人間社会の中に住まわせてみて初めてその性（サガ）が明らかになる。がん細胞もしかり。」&「がん細胞は増殖して仲間が増えると、周囲の正常細胞からのコントロールを脱し、悪性細胞としての行動をとるようになる。君達学生諸君も似たところがある。一人ひとり話をすると、常識もあり善良な青年にみえるのだが、学生自治会として集団行動をとると、変なことを云ったりしたりする。」。さらに、「電子計算機時代だ、宇宙時代だといってみても、人間の身体の出来と、その心情の動きとは、昔も今も変わってはいないのである。超近代的で合理的といはれる人でも、病気になって、自分の死を考へさせられる時になると、太古の人間にかへる。その医師に訴へ、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかへるのである。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである。」』【癌病理学者で癌研の所長でもあった吉田富三（1903-1973）】を語った。

「使命を自覚して任務を確実に果たす社会学 vs 真の目標を見失った細胞集団＝がん細胞」と、まさに、「がん細胞で起こることは人間社会でも起こる」＝「がん哲学」の理念である。「最も剛毅なる者は最も柔和なる者であり、愛ある者は勇敢なる者である」とは、「高き自由の精神」を持って医療に従事する者への普遍的な真理であろう。「他人の苦痛に対する思いやり」は、医学、医療の根本である。今回、『家庭画報』2022年6月号の筆者の記事228-229ページが紹介された(画像)。大いに感激した。早速、「先生の講演は 何度も聞いていますが、その時々によって 私の心に響く言葉が違う事に毎回驚いています。昨日もタイムリーな言葉が たくさん私の心に入ってきました。ありがとうございました。」の心温まるメールを頂いた。大変有意義な充実した時が与えられた。

連載

毎日を心豊かに生きるヒント

# 私の小さな幸せ

第14回 — 樋野 興夫 (病理学者)

『人生を変える言葉の処方箋』『がん哲学外来入門』などの著者、樋野興夫さんの本職は病理・腫瘍学の専門家。多岐にわたる活動で多忙な日々ながら、信条は「暇そうな顔で淡々と過ごす」。その心持ちを伺いました。

撮影／鍋島徳森 背景スタイリング／阿部美恵 取材・文 小松朋子

悩みのない人生なんてありません。

でも明日のことまで

心配しても仕方ない。

1日1時間と決めて、

とことん悩めばよいのです



樋野興夫  
ひのおきお

1954年島根県生まれ。病理学者。順天堂大学名誉教授。新渡戸稲造記念センター長。一般社団法人 がん哲学外来理事長。恵泉女子学園理事長。2000年開催の新渡戸稲造「武士道」100周年シンポジウム、08年「がん哲学外来」立ち上げをきっかけに一躍「注目の人」に。

「人と話すのが苦手で病理学を選んだのに、今や新渡戸稲造や内村鑑三の読書会を開くんだから、人生はまさに『もしかするとこのときのため?』だね」